

6-2-2 田中大秀の住居 その1 (生家)

<香木園跡>

叢桂園そうけいえん扁額は、2面とも江戸中期の著名な南画家池大雅の書。楷書額 41.1×197.0 cm、行書額 42.9×130.0 cm。

叢桂園はかつて高山下一之町田中家の家名とされた。伴蒿蹊宛書状のなかで大秀翁は次のように述べている。

いまカツラといえば楓（オカツラ）のことで、桂（メカツラ）ではない。タブ（クスノキ科）は寒国には育たないので、藪肉桂同類の俗称キョウの木を庭に植えたい。キョウは桂の訛（なまり）か、又は楯（国字）の音読か。古事記に湯津香木（ゆつかつら）とある。「叢桂園」をユツカツラゾノと読むか、「香木園」と書いてカツラゾノと読むことにしたい。

樹皮を乾燥させた肉桂（ニッキ）は健胃剤に、肉桂油は香料や医薬用に使用される。生薬屋にふさわしい家名と言えようか。

薬種商田中家は、高山でも有数の資産家であった。座敷も立派であったに違いない。寛政元年（1789）には巡見使比留間助左衛門、文政11年（1828）には代検見勘定方武島菅右衛門の宿所を引き受けている。

香木園跡は現在鍋島茶舗になっている。

<八幡宮桜山庭碑>

高山桜山八幡宮の社務所前にいまもささやかな庭園を眺めることができ、池畔に西面して小さな石碑が立っている。翁の父博道が当神社の神官として在職中、境内に造庭したその由来を大秀が記したもの。碑面高さ 91.2 cm。

桜山は大町（下一之町）の田中家に程近く、鎮守の森でもあった。庭造りが趣味であった大秀翁実父博道は、八幡社境内に庭が欲しいと考え、しばしばここを訪れては独り酒を酌みながら、あれこれと工事を指図した。急ぐことでもなかったもので、10余年をかけて享和2年（1802）秋ようやく小園が完成した。

翌3年夏杖を曳いてここに遊んだ父翁は、上機嫌で供の家僕に「手入れを怠らず、冬に備えよ」と命じた。その日を最後に翌日から父翁は病の床に伏し、6月18日、ついに帰らぬ人となった。71歳であった。大秀翁は時に27歳。

リーフレットより